

唱題貯金通帳の発行、積み立てるだけでなく、当然引き出しも可。

例えば、入学時に十万遍、その後各項目で支出を決める。一年間交通無事故、就職成就、結婚、安産、当病平癒、子育て成就など。

逆修法号には百万遍差し引く、臨終時にいくら貯金額があるか、子孫にいくらの貯金を残せたか等、具体的に功德を数字で表す。

さらに一万遍と現金をタイプアップさせる。金額で知らせる（要研究）。

市民総題目の実現。

⑬問題点

いかに唱題の質を向上させるか。

空題目との見究め。

御利益追求の題目の熱烈さを報恩の題目へ如何に転換させるか。

尺寸の因行果徳の二法の功德として、自然に得るお題目の功德への徹底。

新興宗教と似て非なる題目の周知。

水の如く、心すなわな無心の御題目へ向わしめる具体策等。

⑭結論

お題目総弘通は、結局、教師が一人づつ、或は先達が一人づつ、能化が一人づつ教化する事。その後の教化こそ、総弘通へ向わしめる。初めは何が何でも唱えさせる事の大事より外にない。

私のお題目弘通の体験

石井 錬 昭

（神奈川・妙伝寺住職）

「私のお題目弘通の体験」という話をせよとのこと、私自身大変お題目に縁のうすい人間ですから。と申しますのは、私は皆のような根っからの出家ではありません。それは、中学一年生当時から十七、八歳位までお経とお題目は唱えましたが、寺の小僧ですから、形だけの修行はさせられました。

どうも僧侶が何となくいやで、それも葬式と法事がい

やで、中学終る時(十八歳)生涯のめしを喰う道を軍人に求めた人間です。

当時(昭和十三年頃)の私は、寺も、僧侶も、信仰も何もわかっていませんでした。

まあ、貧乏寺の小僧には、肩の肩章が目の前にぶらさがっていた盲者だったのです。

お世話になった、ある貫首様から「夢を見るな」とお小言をいわれました。

又、祖母から「これはお題目を唱えなければ生きられない人間だ」といわれました。

体は健康、病氣などしたことはない。だから海軍の学校へ入る厳しい身体検査も通ったわけです。だが、その体も途中で胸部疾患で倒れる。軽かった為か数カ月でもともにもどったようであつたが、完全には治らなかつた。

終戦後大学を終る時には、再度病氣になる。悪くなるでもなく、何年か過しました。これが因縁か業病なのですが、そうこうしている中に、突然、人生の最後を宣告されそうになりました。

医者から「そう長くは生きられないでしょう」といわ

れた時は、これから私はどうしたらよいのだ、とつくづく考えました。

その時の様子ですが、死との対決す。夜中の午前二時から午後三時まで十四時間、肉のかたまりのような血を吐きつづけた時は、医者は最後には「うつ手がなく、このままつづけば終りだ」と思ったのでしよう。

私の枕辺では、母も妻もお題目を唱えながら口からふき出る血をぬぐいとるに手一杯、師匠は本堂で更賜寿命を祈つての寿量品の読誦、こうした中で段々疲れて、精神も朦朧として眠りに落ちかけていたのです。その時、頭のはげた白髪は何千もの僧の姿をみていました。

今思えば、本化の菩薩の姿であつたかも知れない。その中にすやすやと休んでしまった。

数日は絶対安静であつたが、この時から、「自分でお経もお題目もあげるんだ」と。

私は三十五歳で、お経をあげ、お題目を唱えることを知った愚者です。それまでは少しばかり学問的に仏教を学んだつもりでした。

ねたきりで胸に念珠を置き、つまぐりながら一日一万

遍のお題目を唱える誓願行を始め、一百日間あげ通して百万遍唱え、次いで、一日自我偈百遍あげ、一百日間で一万遍あげ通し、これで漸く一人前の体の如くなつたわけです。

仏の教え、因果の法の厳しさの前に立たされました。

「自分のために信をもつてお題目を唱える」、これがお題目を唱える私の出発点でした。

私は心に残る人が二人あります。共に同じような境遇で、血を吐き死の床から題目修行で生きた人ですから、皆さんもご存知と思いますが、一人は小林学進師で、彼は士官学校中途で胸部疾患で倒れ唱題で生きかえる。又、榎井恵学師もやはり胸部疾患で、小康を得て荒行堂で、一万遍の題目を書きつづけ、百日の修行で死から立ち上つた。兩人共に、「妙とは蘇生の義なり」を地で生き、その後の生涯を祖師の恩と一切衆生への恩にかけて終られた方です。

末法の行者息災延命の祈禱の事……

種々の大難にあうと雖も、法華經の功力、釈尊の金言深重なる故に、今まで相違なく候也。それにつけても

法華經の行者は信心に退転無く身にいっわり退転無く、一切法華經に身を任せ、金言の如く修行せばたしか後に後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも成就すべきものなり。（『祈禱經送状』）

とのお言葉の如く、法華經に身をまかせ、お題目を唱えるならば、身は息災延命にして勝妙の大果報を得て広宣流布の大願も成就するの大聖人のお心に接し、私は、「私なりに、法華經を読み、解説もし、お題目を唱え通すんだ」と五カ年間の闘病生活の中の修行を始めましたが、それは明日をも知らない死の前で、中年坊主の修行のやり直しが始まつたわけです。

寺をお題目を唱える道場にするには、どうするのか。

それは、お経の話も、お経を読むことも、お題目を唱えることも、檀信徒と一緒にやらなければいかんと痛感しましたが、その後、縁あつて本山の執事になり、七カ年働きました。この間は本山の運営が第一で、自分の修行は考える暇はなく過しましたが、色々な面で檀信徒とのふれ合い、信行会のもち方等教えられるものがありま

した。本山をやめると同時に師跡をついで、昭和四十三年二月、四十七歳で住職になりましたが、人生五十年の終りになって住職となり、あと幾年もないので急がなければならぬ。相撲の土俵ではないが、俵に足をかけての仕事になったのです。

当時、宗門の危機が叫ばれて護法運動が提唱された頃です。私はこの中に一体どうして入って行くのか、何を柱とするのか、檀信徒は毎日何をするのか、全く暗中模索でした。

先づ、法華経とは題目なんだ、題目教団だからお題目を唱えて、安心して食える寺作りを考えたいわけです。

師匠からついで檀家は実質的には八十六、これではどうにもならぬ。先づ十年間で倍増し二百軒の線にのせたい、これはどうかその線に近づいた。だが、この中で約五十軒が私のお題目で作った改宗の檀家です。私の後ろだてとなり、信者から檀家になった人で、寺には常時来る、題目は唱える、こうした人たちが旧檀家へよい刺激を与えて、檀家が信者への移行をし始めたわけです。

昭和四十三年九月、題目による檀信徒の結集を考えて

信徒の核（リーダー）作りを始め、「本門三秘の一大秘法の題目による成仏、これが末法の題目修行だ、これしか成仏はない」と、横浜・東京・大和等の地区にリーダーを決めて、その家を拠点として題目修行の会を発足し、私の寺へ十三日に各地区から集って修行する。そうすると、こうした信徒へ拜む対象を与える。ハガキ大の十界のマンダラ本尊を一カ年位の間約五十幅以上書き授与し、信徒との縁を結んだのです。その後も仏壇用本尊は書いて授与しております。

四十三年九月、妙伝寺にお題目の靈験の証明^{あかし}として多宝仏塔（多宝如来の宝塔）を建立しました。この題目の塔は、信徒百八十一名の寄進と信徒の修行の宝塔として出発し、これに後に私の寺の檀徒を加えてお題目を唱える人々の結集をしたわけです。

お題目修行は、先づ、「自分の為に、自分でお題目を唱えて救われなさいよ」「唱えれば、本仏釈尊へのご報恩、日蓮聖人へのご報恩、先祖へのご報恩なのだ」と。

いつしか、先祖回向と自己の成仏へと、お題目修行が進んできて、皆信徒は横へ、親戚・縁者へとつながりが

出来てきたのです。

そうこうする中に、「水子供養はお題目で」という声ももち上がり、四十七年には、水子供養のために靈感応のあるリーダーが中心となり、水子地蔵とお題目の功德が結ばれて、約四百名近い水子供養の集団を作ったのです。今は毎年一回秋の彼岸に総供養します。

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す」、この五字の受持に依つてのみ、水子は眞の成仏が出来るのです、と導く。

その頃（昭和四十七年）から護法統一信行が実施され、統一信行の柱はお題目修行です。私は、住職以来毎月二十五日に、釈尊の教え（法華經）と日蓮聖人の教えを学ぶ会行学会を行なってきましたので、この会とのドッキングを実施したわけです。この地区に二カ寺・一結社を拠点とする統一信行の場を作り、読誦会と唱題行を軸に教えを学ぶ会を統一信行として始めることが出来ました。

この頃になると、私の寺では、最初育てた核（リーダー）が年をとり、死亡や活動がにぶり、人員の減少が始まりました。何の会でもそうですが、十年以上たちますと、核

（リーダー）の再教育と新旧の交代が必要となりました。

特にマンネリ化の現象とそれをどうするかの問題です。丁度その頃（昭和五十一年）宗門では、日蓮宗の檀信徒研修道場が身延山で開催されましたので、第一回から第二・第三・第四回にかけて十六名を研修に参加させました。

私が二回・三回・四回と連続して研修道場の講師を勤めましたので、大量の入場をさせ、同時に信隆寺、妙栄結社の檀信徒も同時に参加を願い、二カ年半位の間に、二カ寺・一結社で約七十名の研修者を修了させました。

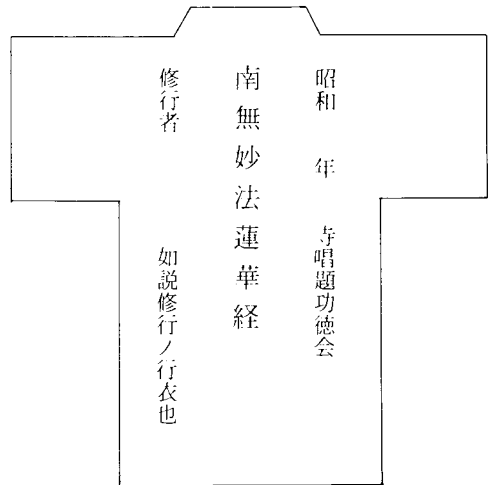
一カ寺で一名や二名研修を修了しても、集団的な力、組織的活動をするためには、余り効果がありません。この人々を中心として昭和五十三年一月から、二カ寺・一結社で宗祖七百遠忌報恩百万遍唱題会を組織して、昭和五十六年正當まで毎日、お寺を報恩唱題の修行道場にしたのです。「お祖師さまへ、誰もが百万遍唱題の功德をつみましょう」の掛声のもと、五十三年から五十六年十月まで毎日唱題行の実施に入りました。研修道場修了者が主軸となり、毎日五人・十人とグループを組んで修行した

ので、寺に住職がいなくても実施されて、第一年目には百万遍唱題修了者が三人、四人と出来、この人たちは二百万遍、三百万遍へ、そして他の人々をリードしながらご正当の日まで行ない、翌五十七年、池上本門寺の大堂前石疊の上で百万遍唱題の報恩の結願法要をもって、参加者百五十余名の報恩百万遍唱題の幕をとじたのです。お蔭で筋金入りの唱題行のリーダーが出来て、お寺へ来てお題目をあげないと何だかいられなくなった、という人まで出来ました。

末法の修行者の機根は「下根下機」ですから、「ただ南無妙法蓮華經の信心が肝要である」と宗祖の教示された通りの修行しかないと思う。

- ここで百万遍唱題の実践とその内容について申します。
- (一) 全員白の行衣を着用している。但し、一遍首題の行衣である(一カ寺一教会で三百着作る。一着分千二百円)字は全部腰より上に書く。行依は現在も追加作成している。

(二) 念珠：梅の玉 白い梵天のもの(三百人分 一個七五〇円)



(一遍首題はヒケ題目)

- (三) 各寺の輪ゲサ着用。お題目修行・講中題目・参拝団等はこの姿で修行している。

- (四) 百万遍修行カードを使用し、毎日の修行をこのカードに記入する、一枚のカードは一万遍で終了する。

- (五) カードは一枚終ると、そのつど、御宝前の百万遍唱題功德箱に納める。各家には百万遍集計表として、「妙法蓮華經」の百万遍マス割りをぬっていく。お題目の字は黒い生き生きとした文字となる。これを先祖

のお仏壇にお供えする。

この方法で四カ年間続けましたので、檀信徒はお題目を唱える日常の習慣が出来てしまった。

七百一遠忌後は、毎日は大変ですので、毎月一日・十日・二十日の三日は、各人が自主的にリーダーと組んで寺へ来て唱題修行をする。

十三日は、寺が主催しての報恩読誦会を午前中、午後は題目修行会と法話の行事をする。二十五日は「教えを学ぶ会(修行学会)」を行なう。

遠忌後は宗徒総弘通と題目修行をする。

(一)檀信徒の服装は前述の通り白行衣とする。

(二)グリーンの唱題修行カードに記入する。修行の集計表は「仏性開顯」の百万遍マス割りをぬっていく、生き生きとした仏となり仏心にかえる。

お題目修行を檀信徒が始めるようになると、他寺院の行事へもよく参加するし、護法特派布教等へも自主的に修行に加わり、自分をみがき、魂の浄化を自然に行なうようになってきました。葬式・法事の寺から題目修行の寺への脱皮が除々に行なわれてきています。

私は、本山の執事時代、堀貫首(後の清澄別当)に、「釈尊の教、日蓮聖人の教えは、その人(学ぶ人)の体験に依っていくらでも深くもなるし、浅くもなるものだ」と、又「出家(坊主)は終生求道とその精進に苦闘する旅人なんだよ」といわれたその言葉が、いつも私の心に去来しています。

「一心欲見仏、不自惜身命」：それはお題目を一心に唱える姿なのです。その心境を、宗祖は『生死一大事血脈抄』に、

相構へ相構へて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ。生死一大事の血脈此より外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提、生死即涅槃とは是なり。信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり。と示され、本化の正行たるお題目を通してのみ成仏も出来、仏国土の建設もなされるのだといわれています。

人はみな仏の子であり、人間の霊なる根本の姿は仏である。仏と私たちはいつも一体である。合掌しお題目を唱えてこそ、仏の救いがある。

そこには、仏と廣大無辺の慈悲がありました。それこ

そ生命いのちの光明であり、あらゆる病める心身を救う大良薬でありました。これが、日蓮聖人の南無妙法蓮華經のお題目の受持一行の成仏なのです。ここに真の救いがある。「唯我一人能為救護―ただ我一人のみ、能く救護をなす」とは、これです。

信心は理論・理屈ではない。他人にすすめられるからするのではなく、自分から、どうしてもやらなければならぬ、やむにやまれない真実の道なのです。だから私たちは、お題目の輪をひろげることが大切なのです。

高齢化社会と日蓮宗教化

大 島 啓 禎

(東京・真浄寺修徒)

はじめに

わが国における人口の高齢化に警鐘が発せられて既に久しい。著しい平均寿命の伸びと死亡率の低さは一般に歓迎されるものではあるが、その一方、高齢者のみが異常に増加する社会の将来は決して明るいものでないこと

も、一般によく知られている。今日、わが宗門をはじめ多くの伝統的仏教教団は、人口過密の都市部を中心として青少年層に教化の対象を転じつつあるが、信徒の主体は依然として中高年齢層にとどまっている。それでいながら、高齢者に対する教化の方策も確立せず、長年の慣習に依るばかりで工夫が足りないというのが実情である。近い将来、全人類を通じてかつてなく、また世界で最も著しい高齢社会を迎える日本、これに対して宗門として、また日蓮宗教師としていかなる教化を展開するべきかを検討することは、遅きに失するとはいえず、現在、最も強く要望されている課題の一つである。

日本の老年人口の現状と動向

昭和五十九年十月一日現在、わが国の総人口は一億二〇二四万人で、そのうち六十五歳以上のいわゆる老年人口は一二九六万人と推計されている。総人口に対する老年人口の比率は九・九パーセント、今年(昭和六十年)一月には既に一〇パーセントを越したとみられる。すなわち、日本では一〇人に一人が六十五歳以上という現状である。

ここで老年人口の移り変わりを見てみよう。図表のと